

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

「家族」

鶴来高校三年 米林翼紗

家族―私の家族は、毎日仕事をよく頑張っている父、たくさん話を
して私の話をよく聞いてくれる母、どんなときでも優しい祖母、よく
遊んでくれる妹、よくケンカするけど、すぐ仲直りする弟、そして私
の六人家族だ。私はこの家族が大好きだ。帰りがどんなに遅くなつて
も温かいご飯が用意されている。私のどんなわがままでも笑って聞い
てくれる。休日には家族みんなで大好きな野球中継を見て大いに盛り
上がる。この家族と毎日過ごせるなんて、私は世界一の幸せ者だ。

家族旅行―私が中学に上がるまでは、毎年家族全員でどこかに旅行
していた。岐阜、名古屋、ディズニーランドなどたくさん場所へ連
れて行ってくれたが、一番の思い出は小学校六年生の時の旅行だ。な
ぜなら、この旅行が家族全員で行った、最後の旅行になってしまった
からだ。

私は小学校四年生の頃より陸上競技に励んでいる。小学校最後の大
会の前、家族にあるお願いをしたのだ。それは…、
「リレーで優勝し全国大会に行けたら、原宿に行つて買い物をして、
また両国国技館にも行つて、お相撲を見たい。」というお願いだ。言
い出したときの緊張感は、今でもはっきりと覚えている。もちろん私
のわがままではないのだが、家族はしっかりと約束してくれた。そ
して、県大会で優勝し、全国大会出場を決めた私は、めでたく家族と
の約束もかなえられることとなったのだ。

みんなで رفتつた原宿と、国技館での相撲観戦は一生忘れない。もち
ろん、私の願いを二つ返事で叶えてくれた家族への感謝の気持ちも生
涯忘れない。しかし、これが家族みんなで行つた最後の旅行となつて
しまつている。私が中学生になり、陸上競技に没頭してしまうことにな
つてからというもの、みんなの予定が合わず、旅行に行くことが無
くなつてしまつた。最後の、あの旅行時に戻つて、またみんなで行き
たいと激しい寂しさを感じる。

応援―私の陸上競技大会には、必ず応援に来てくれていた。たとえ

記録会であっても、必ず応援に駆けつけ、動画を撮つてくれてもい
た。特に、高校三年生の県総体で優勝したレースが強く心に残ってい
る。そのレースは○・○一秒差で私が初めて優勝した厳しい展開とな
つたこともあるが、表彰式後に母から見せてもらったレースの動画を
見て、とても驚いたからだ。その動画には、家族全員の大きな声援が
しっかりと記録されていたのだ。

「つばき、行け！行け！行け！」

何度も何度も絶叫していた。判定で優勝が確定した瞬間には、歓喜の
声が大きすぎて音が割れ、聞こえないほどに喜んでくれていたのだ。
私は緊張感マックスの状態で、しかも、競技に集中していたので、こ
んなに大きな家族の声援が全く聞こえていなかったのだが、後になつ
てこの応援の事実がわかり、涙があふれるほど嬉しい気持ちになつた
のだった。

実はこの大会だけで無く、ほとんどすべての大会で、今回と変わら
ず大きな声で応援してくれていたらしい。レースに集中するあまり、
私は全く気づかなかつたのだが、きつと強い追い風となつて、私の走
りを後押ししてくれていたに違いない。

北信越大会や全国大会など、県外が会場となることが多々あつた
が、家族旅行に行けない寂しさを埋め合わせしようと、私の競技大会
を通じて、家族を県外に連れて行きたいという気持ちが急激に高まつ
ていったのだ。

毎回大会が終わる度に、「ここまで連れてきてくれて有り難う。」と
家族は笑顔で言つてくれた。私はその度に、頑張つて競技をしてきて
本当に良かったと思うと同時に、もつともつといういろんな場所に家族
を連れて行きたいと思うようになり、一層競技に集中していったのだ
つた。

ところで、最近母の大変さを実感した出来事があつた。高校最後の
夏休みに入ってから、私は自分でお弁当を作り始めたのだが、数日後

にはすっかり音を上げていた。毎朝早起きするだけでも私には大変なのだが、飽きが来ないように違うおかずにし、しかも、栄養のバランスや見た目の彩りも考えなければならぬ。母はよくもまあ、毎日毎日こんなことをしてくれていたものだと思うと頭が下がる。しかも、朝食の準備や後片付け、洗濯も同時進行でこなしている母。嫌な顔一つせず、家族のためにせつせと世話を焼いてくれる母。母の偉大さが改めて実感でき、少しでも負担を減らすために、私が手伝わなければ——この九年間競技に集中できたお返しを、母にしなければ——と痛感している毎日である。

私はもうすぐ、大好きなこの家族と離ればなれになる。高校卒業後、スポーツ競技と運動の勉強をしつつ、理学療法士の資格を取るために、効果的に学べる県外の大学へと進学する予定だからだ。家を出ることに強い違和感・拒否感はあったが、人生は一度しかないから、好きなことをとことんやれと、家族みんなが背中を押してくれたのだった。大切な家族と離れることはとても寂しいし、一人暮らしへの大きな不安もあるが、やはり、私は自分の夢に向かって前進し続けることに決めた。

ところで今、私が大好きなこの家族にできることは何があるのかと考えてみると、少しでも家族と一緒にいる時間を大切にすることだど気がついた。朝起きて顔を合わせた瞬間から、夜に野球中継を見て大騒ぎし、お休みの挨拶をして床に就く瞬間まで、一瞬一瞬を愛おしみ、残り少なくなった家族との時間を大切にしていきたい。

ゆくゆくは私が、私の愛するこの家族のような温かい家庭を築くことを目標に、一日一日を大切に過ごしていきたいと思う。

